

【一般口演2】 第7席

医書序文にみる医学史観

宮城 松木 きか

“序”の意味するところは“緒（いとくち）”であり（『爾雅』）、その著作がどうして出来たものかを順を追って説明することを目的とし、そのスタイルには“議論”“叙事”の二つがある（「文体明弁序説」）とされる。医書に付された序文の直接の意図はその書の意義を述べることにある。そのために、或いは遡って医学の歴史を“叙事”し、或いはあるべき医書の姿を“議論”してきた。

現存する医書の序文では、後漢の『傷寒論』張機原序がもっとも早い。序文は『史記』扁鵲伝に伝わる医学と比較して当時の医学の浅薄さを嘆じ、著作の経緯を自述し、さらに上古・中古・漢・今という時代区分を用いて医学史を説く。『黄帝内経』の再編纂書である『鍼灸甲乙経』は魏晋の皇甫謐の撰とされる。序文は医学史を述べる際に、湯液と鍼灸との二つに分け、上古・中古・近代・近世と時代区分する。この考え方は、北宋の医書校訂に影響を与えているとみられる。『黄帝内経』や『傷寒論』のような基本的な医書には、後世、多く注釈が加えられ、再編纂が試みられた。そのつど序文は、当時の医学を批判し、基本的な医書を学ぶ必要性を説いてきた。

一方、諸家の“方論”序文は、そうした基本的な医書が理解し難く時世に合わないとして新しい治療法を提案した。東晋の葛洪の編んだとされる『肘后方』序は、伝世の書が煩雑で使用しにくいことや、自著が古きを尊ぶ世間に容れられない可能性を指摘する。この『肘后方』もまた、後に増補され、多くの序文が付されていくことになるのである。

このように、医書の序文は、それぞれの成立・伝来事情を示すと同時に、その時代の医学のあり方をも表わしている。また、序文そのものが、互いに関連し合い、出入し合いながら、医学思想を形成し、後世に影響を与えてもいるのである。本発表はこれら医書の序文から看取される医学史上の諸問題について検討するものである。